認定特定非営利活動法人
日本がん登録協議会
JACR Japanese Association of Cancer Registries

NEWSLETTER 年2回発行
JACR ニューズレター
July.2019 No.47

認定NPO法人になりました!

2005年 保健文化賞 受賞

2016年 朝日がん大賞 受賞

日本医師会JACR共催シンポジウム開催報告

猿木 信裕　JACR理事長
群馬県衛生環境研究所

2018年12月8日に日本医師会と日本がん登録協議会(JACR)の共催で「有効ながん検診を正しく実施するために～がん登録への期待～」と題したシンポジウムを開催しました。

がん登録の精度が向上し、全国のがん罹患数が把握されようになり、地域でがん検診の精度評価に取り組む環境が整ってきました。そこで今回はがん検診をテーマにしました。

シンポジウムでは、はじめに横倉義武日本医師会会長が主催者を代表して、開会の挨拶をされました(今村聡副会長代読)。続いて、厚生労働省医務技監の鈴木康裕先生、日本対がん協会常務理事の山口俊晴先生、国立がん研究センター社会と健康研究センター長の津金昌一郎先生、国立がん研究センター松田智大先生(IACR理事長)からご挨拶をいただきました。

シンポジウム1では、「諸外国でのがん検診とがん対策の位置づけ」として、国際がん研究機構(IARC)のパルサ・バス先生に「五大陸のがん検診」について、ご講演いただきました。質の悪いがん検診は効果がなく、利益よりもむしろ不利益を及ぼすこと、過剰診断の弊害、検診対象者の絞り込みによる不利益の最小化、欧米の組織型検診等についてお話しいただきました。

シンポジウム2「がん検診アセスメント」では、「我が国の対策型検診の歴史と現状」について、斎藤博先生(青森県立中央病院医療顧問)は、わが国の対策型検診で科学的根拠のない検診が実施されている問題、診療と区別したがん検診の原則の理解、医学教育カリキュラムにがん検診を据える重要性についてお話しされました。中山富雄先生(国立がん研究センター社会と健康研究センター)は、「有効性の検証とガイドライン作成」について、進行の早いがんは発見されにくいこと、↗がん検診においては不利益が利益よりも小さいことが大事であり、ガイドライン作成の要件、各検診の推奨度についてお話しいただきました。お二人とも、がん検診の有効性の指標は死亡率の減少であると強調されました。

シンポジウム3の「がん検診マネジメント」では、雑賀公美子先生(国立がん研究センター)から、「法制下のがん登録のがん検診精度管理への活用」として、がん登録から得られたがん情報は、市町村が管理するものであり、市町村のがん検診データをがん登録室(都道府県)で照合することが現実的であるとのお話しでした。松坂方士先生(弘前大学)は、青森県のがん死亡率が高い原因について検討し、青森県は決して検診受診率が低いわけではなく、早期に発見されるがんが少ないということが課題であり、市町村と協力したがん検診精度向上の取り組みについて報告いただきました。永井尚子先生(和歌山市保健所長)は、厚労省研究班の協力を得て、和歌山県、和歌山市、医師会、県立医大と協力して、がん検診受診者データとがん登録のがん罹患者情報を照合し、要精検以外からのがん発生について報告され、検診事業におけるデータ管理の重要性を指摘されました。

シンポジウム開催にあたり、貴重なご講演をいただきましたシンポジストの皆様、ご協力、ご協賛いただきました関係各位に厚く御礼申し上げます。

今回のシンポジウムのスライドは、J-CIP Webに掲載しましたので、ご利用ください。

J-CIP EMPOWER　シンポジウム

http://jacr.info/j-cip/empower/symposium.html

日本医師会JACR共催シンポジウム 全体報告

伊藤 秀美　JACR理事
愛知県がんセンター研究所

2014年から開始されている日本医師会との共催シンポジウムが、2018年12月8日に開催されました。今回で5回目となります。当日、会場である日本医師会館近くの六義園では紅葉が見頃で、駒込駅から会場へ向かう途中にある入り口は多くの見物客で賑わっていました。

それはさておき、過去のシンポジウムの内容を振り返ると、がん登録推進法施行を1年後に控えた2014年のテーマは「これからのがん登録とどう付き合うか」、がん登録推進法施行を目前に控えた2015年は「がん罹患・死亡の都道府県較差はなぜ起きる?」、がん登録推進法施行1年を経た2016年は「本当に増えているがん、減っているがん」でした。2017年のシンポジウム「始まった希少がん対策」からは、構成が二部から三部構成に変わり、第一部では、テーマに沿った分野でご活躍されている専門家を海外より招待し、世界における動向をご紹介いただく内容となりました。回を重ねるごとに、内容が日本においてがん登録情報をがん予防、医療、対策に最大限に利活用するにはどうしたらよいか、日本のがん登録の方向性を考えさせられる、より具体的な内容へと変遷、発展していっているように思います。

2018年のシンポジウムも三部構成での開催となりました。総合司会の役得で、私は各演者のご講演を壇上で拝聴し、↗「がん検診を正しく評価し、有効ながん検診を正しく実施すること」に対する各演者の熱い思いを間近で感じることができました。全体的な内容については、猿木理事長からご報告がありましたので、私は、特に国際がん研究機構のパルサ・バス先生のご講演の中でご紹介のあった「Canscreen5(5大陸のがん検診)」に焦点を絞りたいと思います。

Canscreen5は、バス先生が研究代表者として推進しているプロジェクトで、がん検診の実施・調査には有用な健康情報システムが不可欠である、質の高いデータを収集することで重要ながん検診精度管理指標の推定が可能となる、その精度管理指標は事前に標準化されるべきであるという考えに基づくものです。このプロジェクトでは、世界中のがん検診プログラムの特徴と実績について、定義や収集方法を標準化した上で情報を収集し普及させ、がん検診プログラムの品質管理・改善や情報に基づく政策の実現、健康情報システムの整備や強化、これらに関する研究に対し各国を支援することを目標としています。

上段左から松坂氏、伊藤(秀)氏、中山氏、永井氏、雑賀氏、大木氏、伊藤(ゆ)氏、斎藤氏、西野氏、松田氏、
下段左から山口氏、津金氏、バス氏、猿木理事長、今村副会長、羽鳥氏

JACR SYMPOSIUM 2018

有効ながん検診を正しく実施するために

がん登録への期待

↘講演で紹介されていたように、収集・分析された成果は、健康情報システムとしてオンラインポータル(http://canscreen5.iarc.fr/)上に整備され、もうすぐ公開されるようです。バス先生が、検診データベースとがん登録とのリンケージにより「中間期がん」の同定、検診精度管理指標(発見率、陽性反応的中度、上皮内がん・浸潤がん比率)の推計、「任意型検診プログラム」による発見がん割合の推計が可能となり、長期間の検診の効果を評価するためのキーとなると、がん登録情報の重要性について強調されていたのが印象的でした。

全国がん登録推進法に基づき2016年診断のがん罹患数の速報値が初めて公表されました。情報が安定するのにはしばらくかかりますが、精度的には国際標準と比しても遜色なく、これからはいかに活用していくかが重要になります。個人的には、がん登録に関わる疫学研究者として、どんどん活用し成果を様々な形で公表したいですし、日本にもCanscreen5のような健康情報システム、米国SEERのような情報提供システムなどの整備が進むとよいと期待しています。↗

↘以上やや脱線してしまいましたが、今後もがん登録情報の利活用をテーマとしたシンポジウムの企画を期待しつつ、日本医師会との共催シンポジウム2018のご報告と感想を終えたいと思います。

第78回 日本公衆衛生学会 総会 (10月23~25日、高知市)の紹介

安田 誠史 JACR理事

第78回日本公衆衛生学会総会学会長
高知大学教育研究部

私が委員長を務めている本協議会学術委員会の活動については、本レター45号で紹介済みですので、本号では、私が学会長として、本年10月23日(水)から25日(金)にかけて、高知県高知市において、テーマ「実践と研究との協働の深化~マインドとコンピテンシー~」の下に開催する第78回日本公衆衛生学会総会を紹介します。

まず、この総会のテーマのねらいを説明します。人びとが健康、安全、安心に暮らすための基盤である公衆衛生を、実践活動の効果を評価しながら向上させるために、また、公衆衛生の領域で起こる多様な新課題を迅速に把握し、対応策を時宜を失することなく社会実装するために、実践と研究との協働cooperationは欠かせません。協働の深化のために、実践家と研究家とに、それぞれの立ち位置で大切にすべきマインド(問題認識と価値観に影響する志向)、そして磨きをかけるべきコンピテンシー(知識、技能、態度を統合して活用する能力)を整理していただく機会になればと考えています。

日本公衆衛生学会総会では、例年、がん登録従事者による一般演題発表に加え、がん登録運営の実務面での課題や登録資料の活用をテーマとするシンポジウムが行われます。本協議会からの出版物の展示もあります。これら、がん登録従事者が実務と研究での経験を交換し、ネットワークを拡げることに役立つ行事は、第78回総会でも行われます。

会場は、高知市の九反田地区と本町地区とに分散して配置されます。本町地区では、江戸時代からの天守と追手門が残る高知城が、九反田地区では、幕末の志士坂本龍馬の像が太平洋を臨む桂浜への移動の拠点になるはりまや橋が徒歩圏内です。高知県には、食のコンテストで常に上位にランクインする鰹のたたきと日本酒に代表される豊かな食材があります。第78回総会に参加登録いただき、高知の風土・食もお楽しみください。

第78回日本公衆衛生学会

http://www.c-linkage.co.jp/jsph78/

委員会報告 [教育研修]

大木 いずみ JACR副理事長

栃木県立がんセンター

杉山裕美　放射線影響研究所
伊藤秀美　愛知県がんセンター
寺本典弘　四国がんセンター
海崎泰治　福井県立病院

教育研修委員会では会員のみなさまに少しでも役に立つ情報を共有するべく、がん登録の手引きを刊行、学術集会における実務者研修会の企画、総会時のがん登録実務功労者表彰等実施しています。また必要に応じて、国際研究へのデータ提出支援や情報提供も行っています。

がん登録に関わる、がん情報の収集、整理、データの集計からがん対策への活用、研究利用と日本がん登録協議会(JACR)の様々な委員会やがん登録担当者と関わりながら同じ目的に向かって活動しています。

がん情報収集という点では院内がん登録との連携が欠かせません。JACRでは院内がん登録への取り組みも含めて活動を展開していきます。特に教育研修委員会の病理医は病理のエキスパートであるとともにがん登録も熟知していますので、その視点からの支援となります。

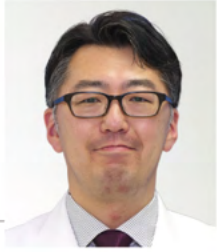
ご意見やご要望がありましたらお寄せください。教育研修委員会は会員のみなさまとともによりよいがん登録を目指し、がん対策につなげる活動を推進したいと思います。

がん登録の手引き

表彰式のようす

委員会報告［広報］

広報委員会の活動と今後の方針



松坂 方士 JACR理事

弘前大学医学部附属病院

杉山 裕美　放射線影響研究所
片山 佳代子　神奈川県立がんセンター臨床研究所
田渕　健　東京都立駒込病院
阪口 昌彦　神奈川県立がんセンター臨床研究所

広報委員会では各都道府県がん登録室やがん登録を利用した研究の紹介、がん対策の今後に関する提言などをご寄稿いただき、ニューズレターを通して会員の皆さまのがん登録運営に役に立つ情報を発信してきました。また、協議会ホームページの内容を見直し、がん対策の基盤であるがん登録の重要性をアピールすることにも努めています。

がん登録等の推進に関する法律の施行に伴い、都道府県は精度向上の一歩先であるデータ利用の整備への対応が必要です。また、当協議会が進めているJ-CIP事業に代表されるように、がん登録データはがん対策のさまざまな場面で重要な鍵となります。広報委員会ではこれらについて情報提供していくとともに、ニューズレターでデータの解釈に役立つ統計の知識などを連載して実務者や行政担当者が統計資料への理解を深めることをお手伝いすることで、当協議会の活動が今後の都道府県のがん対策にさらに貢献できるようにしたいと考えています。

また、先日の臨時総会で新しく会員資格が認められた病院（院内がん登録）についても、協議会の内外からニューズレターへのご寄稿をいただきながら情報交換を推進していきたいと考えています。将来的には、広報委員会が都道府県の全国がん登録実務者と院内がん登録実務者の橋渡しをしつつ、双方に必要なデータ集計と報告書等への活用方法の紹介、登録実務に必要な知識の周知などの役割をニューズレターが担っていければと期待しています。また、これまでニューズレターは年2回の発行としてきましたが、院内がん登録はこれまで協議会が経験したことのない規模の情報提供相手であり、タイムリーな対応が必要なことから、メールマガジン形式などによる情報提供も検討しています。

広報委員会ではSkypeを利用して適宜意見を交換しています。会員の皆さまから「このような情報が欲しい」というご意見をいただければ、ぜひ検討させていただきたいと考えております。

委員会報告［国際交流］

伊藤 ゆり JACR専門委員

大阪医科大学

松坂 方士　弘前大学医学部附属病院
中田 佳世　大阪国際がんセンター

先日開設されたJ-CIP WebsiteのGlobalページでは、サバイバー生存率のインフォグラフィクスや、がん生存率の国際共同研究CONCORD studyや国際がん小児がん罹患（IICC）など世界のがん統計についての解説文が掲載されています。また、これまでの国際がん登録学会の参加レポートも掲載されていますので、ぜひご覧下さい。
http://jacr.info/j-cip/global/index.html

2019年3月25～29日、Global Initiative for Cancer Registry Development (GICR)の活動の一環で、大阪国際がんセンターがん対策センターの中田佳世氏、大川純代氏、秋田県総合保健事業団疾病登録室の佐藤雅子氏が、中国National Cancer CenterのRongshou Zheng氏とともにベトナムのハノイがん登録室を訪問し、がん登録の運営や登録実務、データの利活用についての講義や意見交換を行いました。

2019年6月9～13日の日程で第41回国際がん登録学会（IACR）北米中央登録室協議会の年次総会（NAACCR）と合同で開催されます。日本からも数演題が口頭・ポスター発表に選ばれています。北米開催の際は演題数も多く、がん対策や学術的に価値の高い多くの話題を聞くことができますので、参加者による次号以降のレポートをご期待下さい。

登録実務に関連するお知らせとしては、ICD-O-3.2の更新が終わり、IACRのウェブで公開されました。2020年からの使用が推奨されています。ご参照下さい。
https://bit.ly/2W9kw30

また、中田佳世先生が監修されたトロント小児がんステージガイドラインの日本語訳が公開されています。
https://bit.ly/2VkubH5

委員会報告［安全管理］

西野 善一 JACR副理事長
金沢医科大学

大木 いずみ　栃木県立がんセンター
茂木 文孝　群馬県健康づくり財団
伊藤 秀美　愛知県がんセンター研究所
金村 政輝　宮城県立がんセンター研究所
森島 敏隆　大阪国際がんセンター

国立がん研究センターがん対策情報センターは、1年あたりおよそ10の都道府県の安全管理措置に関する外部監査を同センターの指定した団体が実施することにより、各都道府県に5年に一度の頻度で外部監査が実施されるように努めています（国立がん研究センターがん情報サービスホームページ：https://ganjoho.jp/reg_stat/can_reg/national/prefecture/audit.html）。

JACRは平成28年度より国立がん研究センターより「都道府県がん登録室外部監査業務」を受託しており、昨年度も10県に対して監査を実施しました。その概要は以下のとおりです。安全管理委員会委員を含む23名から構成される外部監査委員会を組織し、監査方針および監査対象となる都道府県がん登録室を決定しました。対象県に対して規程やマニュアル、管理記録簿の様式等の文書類の提出を依頼し、これらを元に担当監査人が安全管理措置状況の事前評価を行いました。その後、平成30年11月から12月にかけて監査人が現地を訪問して、登録室責任者からの聞きとりや視察による現地監査を行った後に監査結果報告書を各県に送付し、各県からは指摘事項に対する欠点改善報告書を受領しました。これらの監査結果をまとめた報告書を国立がん研究センターに提出して監査業務を完了しています。平成28年度からの外部監査の結果は国立がん研究センターがん情報サービスの上記URL上で順次公開されています。

平成30年3月に出された「全国がん登録における個人情報保護のための安全管理措置マニュアル第1版改定版」では、従事者に対する安全管理措置に関するテストの実施と結果の取得、ならびに結果に応じた再教育等の対応を行うことが人的安全管理対策の基本対策に加えられました。委員会活動の中でいくつかの登録室からテストの実施が負担であるとのご意見をいただいていましたが、平成31年4月に国立がん研究センターより3種類（各10問）のテスト問題と誤答があった場合の再試験用問題（13問）、およびこれらの解説からなる冊子が各都道府県のがん対策行政担当者に送付されました。各登録室がこの冊子に基づいて教育を行うことを啓発、支援することが本委員会の今後の重要な役割の1つと考えています。

令和時代のJACR Monograph

宮代 勲 JACR理事
大阪国際がんセンター

JACR Monographは年に1回開かれる学術集会の記録集として、JACRが1995年に発刊しました。2013年（第19刊）から論文の投稿も募集し、毎年度1冊が刊行されています。平成31年3月発刊の第24刊から、新たな編集体制となりました。

新たな編集体制での発刊に際して、第1部を構成する論文集の論文の投稿規定や査読プロセスを見直しました。例えば、編集委員以外の査読者も含めた複数でのpeer reviewとしました（投稿案内は、http://www.jacr.info/publicication/pub_monograph.html）。

査読プロセスを経ない第2部を構成する学術集会記録については、あり方を見直しました。従来のB5版ではなくA4版とし、抄録集の再掲については縮小掲載、研修会資料については再掲しないことで、学術集会での配布物との重複に配慮しました。抄録集の再掲とは別に、優秀賞受賞演題、一般演題以外の全演題、一般演題のうち希望のあった演題については、発表者に4ページ以内でまとめるよう依頼し、講演スライドハンドアウトやポスターの形式も許容しました。抄録に加筆するが査読プロセスは経ない従来形式のページ数を減らし、査読プロセスを経る論文としての投稿を促しました。初めての試みであったことをふまえ、4ページを超える一般演題もそのまま掲載しました。次の第25刊では、ページ数や形式を整理することで、より読みやすいものにする予定です。

ISBNが取得されておりJACRが定期に刊行する、がんの記述疫学研究を主とした学術的な単行本です。放射線影響研究所疫学部の杉山裕美先生、大阪国際がんセンターがん対策センターの田淵貴大先生と私の三人で編集を担っています。がん登録の活用として、がん対策を効果的に推進するための一助になることを願っています。

JACR モノグラフ投稿案内

http://www.jacr.info/publicication/pub_monograph.html

LOCAL

第77回 日本公衆衛生学会自由集会 @福島の報告

Japan Cancer Information Partnership

患者目線

患者会からの報告　鈴木 牧子　がんピアネットふくしま　理事長

2018年10月25日、福島県郡山市での公衆衛生学会学術会議会場にて、「自由集会」が開催されました。学会長が、福島医大の安村教授であったことと関連して、福島のがん患者会ネットワークである当NPOがんピアネットふくしまに、演者も含めて協力の依頼がございました。J-CIPが、全国がん患者連合と締結して、広報していく事などは、地方にいる1団体としては、理解できておらず、昨年度鹿児島の事例から、全がん連理事が集結、講演するのを福島でも再現するだろうか?と感じました。ところが、演者も私の方でテーマにそってさがす、懇親会会場も・・・となると、さすがに福島県の為にじっとしていることはできず、本気になって動き始めました。

結果、福島医大MSWの渡邊美伊子さん、当NPO会員で薬剤師の浦山典子さんと、私が演者としてお話させていただきました。猿木理事長はじめ、担当の片山さんには、大変お世話になりました。今後、全国をこのような形で回ることを予定されて活動を続けるには、全がん連との連携や相互理解が、地方の団体との間に必須となるでしょう。

さて、日頃知ったお顔の先生たちもいて、懇親会の方は、とても和やかに楽しく交流できました。当NPO会員も「自由集会」↗「懇親会」と参加されて、結果的には良い時間を共有することができました。

「がん登録」に対する患者目線からの、率直な意見も多くお伝え出来たかと、思います。

福島県は、とても広く、復興途上で感情問題さえ含む様々な課題も抱えています。

そのような中ではございますが、科学的分野の情報を学ぶ機会にめぐまれましたこと、感謝申し上げ、皆さまのますますのご活躍を祈念申し上げます。

J-CIP目線

J-CIPローカル 第2回目の活動報告　片山 佳代子　JACR監事　神奈川県立がんセンター臨床研究所

福島県郡山市のビックパレットふくしまで開催されたJ-CIPローカルの活動の一環である自由集会『Partnership　～がん患者と繋ぐこれからのパートナーシップ～』は今回も盛況のうちに終了することができました。それもすべてはNPOがんピアネットふくしま理事長の鈴木牧子さんをはじめ、患者会の皆さんのご協力とご尽力の御かげであることは言うまでもありません。色々と不手際があったにもかかわらず細かいところまで行き届いたご配慮をいただきましたことを改めて感謝申し上げます。

J-CIPローカルでは、都道府県ごとのがん情報を地域のニーズに根差した形で発信するために、まずはその地域の患者会とがん登録関係者が顔を合わせ、互いの存在や活動についてパートナーシップを築く"きっかけ作り"を目的にスタートしました。今回第2回目と活動はまだまだ浅い中で、福島のがん登録関係者、がん相談支援に携わる方、患者さん達、そして福島県↗のがん対策を担う方々に集まっていただき、参加者も満席の状態で終了することができました。この自由集会でのご縁はwebサイトJ-CIPローカル福島県版の制作に生かしていけたらと考えています。

また、この場をお借りしてのご報告ですが、第3回目にあたるJ-CIPローカルの活動は、日本公衆衛生学会から日本癌治療学会へシフトチェンジしていく予定です。2019年の癌治療学会(福岡)は公衆衛生学会(高知)と日程が重なり、見送りましたが2020年は、もともと患者さんたちが多く参加される癌治療学会にて、再び患者さんたちとの協働での活動を企画したいと考えていますのでどうぞ、よろしくお願いいたします。最後に、西へ東へとご多忙の中、全がん連理事長の天野慎介さんにも自由集会当日駆けつけていただき貫禄、安定の司会をご披露いただきましたこと、御礼申し上げます。

第40回国際がん登録協議会（IACR）参加報告

澤田 典絵

国立がん研究センター　社会と健康研究センター　疫学研究部

私は、多目的コホート研究・次世代多目的コホート研究において、がん登録を研究活用させていただいており、2017年度から、厚労科研松田班「都道府県がん登録の全国集計データと診療情報等の併用・突合によるがん統計整備及び活用促進の研究」において、疫学研究におけるがん登録の利活用の検討を行っております。

2018年度は、11月13日から15日にかけて、南米は、ペルー・アレキパで開催された、第40回国際がん登録協議会（IACR）に参加しました（http://www.iacr2018.org/）。IACRの参加は2度目で、昨年のユトレヒトでは社会格差を踏まえてがん登録データを解析するなど、一歩踏み込んだ内容が多かったように感じましたが、今回のアレキパでは、ある国のある地域においてがん登録が整いました、という発表もみられ、がん登録がすすんでいる国がサポートしながら、世界的にもがん登録が整備されていく過程や重要性を感じました。一方で、CONCORD databaseなど、世界のがん登録データを統合し、がん生存率の各国比較や、さらに、世界レベルでどのように活用していくか、という試みの発表もあり、これからは、がん登録の研究への利活用が、より一層すすんでいくことを感じました。↗

IACR 2018 Enrico Anglesio Prize候補者の若手2名

↘日本からは、がん登録に携わる7名の研究者が参加されていましたが、申請利用のみする立場の私としては、素朴な要望や疑問もあり、いつも、その疑問に温かく答えていただき、活用が難しい理由を教えていただくことで、がん登録への理解が深められることも、私にとってのIACR参加の醍醐味です。また、理解が深まるほど、がん登録の実務者・研究者への感謝が増し、お互いを尊重しながら利活用を進めいく重要性を感じます。

IACR 2018 Social Programme and Dinner：サンタ・カタリナ修道院にて

学会に参加することで得た情報と受けた刺激はたくさんありましたが、今回は、自らではおそらく訪れなかった南米に、しかも、アレキパにたどり着くことができ、思った以上に美味しいペルー料理を食べられたことが特に思い出となりました（おすすめは、セビーチェとクイ）。

BOOK order

刊行物の販売について

JACRでは、『がん登録の手引き改訂第6版』を1冊税込1000円にて販売しております。
ご購入をご希望の方は、右記QRより注文票をダウンロード頂きFAXまたはメール添付にてJACR事務局までお送りください。　※送料のご負担をお願いしております。

3冊まで ＞ レターパックライトにて発送。　3冊～5冊まで ＞ レターパックプラスにて発送。

連載
病理医のつぶやき

がんの診断に欠かせない病理診断を病理医の先生が解説

第三回／変貌するがんの病理診断と病理医の役割

神奈川県立がんセンター臨床研究所　所長　宮城 洋平

特にがんの診断においては、病理診断は、最終診断です。基本的に病理診断を以てがんの診断が確定します。ひらがなの「がん」は広く悪性の新生物を示す言葉ですので、がんと診断すればそれで終わりではありません。肉腫なのか、上皮性の癌なのか、癌だとして、腺癌、扁平上皮癌、小細胞癌‥‥、その組織形態学的な特徴などから、更に詳細に診断します。同じ腺癌でも、高分化（正常の腺組織に似ている）から低分化（あまり似ていない）まで色々ありますし、また、発生する臓器が違うと形態や悪性度も同じではありません。がんの病理組織診断は、単にがんを細かく分類するためにあるものではなく、診断名を正確に付けることによって、患者さんの治療方針の決定などに有用な情報をもたらします。

病理組織診断は、検体をホルマリンで固定しパラフィンに封入した(formalin-fixed paraffin-embedded, FFPE)組織を数ミクロンの切片にして、ヘマトキシリン-エオジン染色した標本の形態学的観察で実施しますが、抗体を使った免疫組織化学や染色体を解析する蛍光in situハイブリダイゼーションFISHなど、薄切切片上で実施する補助診断が発達しています。一方で、特に最近の進歩が目覚ましいのが、患者さんの治療方針決定などに有用な情報をもたらす遺伝子診断です。多くの遺伝子診断では、未固定のがん組織（生や凍結保存されたがん組織）やFFPE組織から核酸（DNAやRNA）を抽出して検査します。↗

↘FFPE組織の核酸の品質は、ホルマリンの濃度やpH、ホルマリン固定を開始するまでの時間、ホルマリンで固定している時間、FFPE組織の保管状態、等に大きく左右されます。

核酸が劣化していると検査ができません。また、核酸を抽出したFFPE組織切片に、がん細胞がどの位の割合で含まれているかも検査結果に大きな影響があります。壊死や出血、強い炎症がある部位などは避けないといけません。適切な検体処理とFFPEブロックの作製、遺伝子診断に使うFFPE組織（パラフィンブロック）の選択、がん細胞含有率の的確な判定などが、がんの遺伝子診断における病理医の重大な役割となります。今まで、がんの診断で主役をはっていた病理医ですが、検体を準備する脇役に回ったような寂しさを覚えます。特に、多数の遺伝子の異常を一度に解析する遺伝子パネル検査などでは、なおさらです。紙面の余裕がありませんが、artificial intelligence (AI)の進歩も目覚ましく、AIの導入で、細胞診、その次には組織診断など、病理医のお仕事の本丸も脅かされつつあるとの声も聞こえます。ですが、ものは考えようで、遺伝子診断やAIを眷属に従えて、より優れた病理診断と、豊かな病理医生活を実現させる良い機会なのではないかとも思っています。

常時受付中

当会への寄付

活動を支援して下さる方を募集します

連載 データの解釈に役立つ統計の知識
～基本的な落とし穴とその対策～

第4回 サバイバー生存率：新しい予後指標

大阪医科大学
JACR専門委員 伊藤 ゆり

サバイバー生存率とは？

がん患者さんの生存率はがん登録資料を用いた報告値の中でも関心の高い統計です。これまでは、5年生存率や10年生存率が報告されてきました。患者さんは診断時にこの指標を医師に提示されたり、ご自身で調べたりされ、5年または10年間、この値を参照して療養生活を送られてきました。例えば、5年生存率が20%だった場合、5年後まで自分が20%に入ったかどうかわからず不安な日々を送ります。サバイバー生存率は、正確には条件付き生存率（Conditional Survival）といいます。通常の5年生存率は全対象者を含めた累積生存率であるのに対し、1年以上生存された方に限定してその後の5年生存率を算出、2年、3年・・・と診断からの経過年数ごとにその後の5年生存率を計算し直したものです。

最初に提示された5年生存率は全ての患者さんを含んでいるため、診断から年数が経過すると対象者が変化していくので、ご自身の経過年数に応じたその後の生存率を確認することができます。そこで、サバイバーの皆様に活用していただきたいという思いを込めて、サバイバー生存率と呼んでいます。

どうやって算出するの？

サバイバー生存率の算出は非常にシンプルで、通常の5年生存率（相対生存率やネット生存率など）を算出する際の対象者をX年以上生存している方に限定し、その後の5年生存率（X+5年生存率）を算出します（図1）。10年生存率が計算可能なデータセットですと、診断から5年後のサバイバー5年生存率（その後の5年生存率）が算出できます。Period法を適用すると、より最新の情報を反映したサバイバー生存率を提供することができます。↗

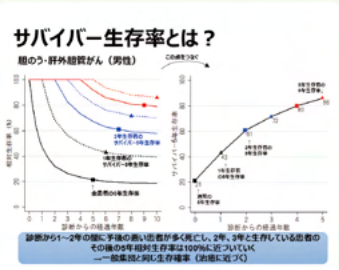


図1

どこで見られるの？

↘先日公開されたJ-CIPウェブサイトのGlobalのページに、サバイバー生存率が概念的にわかりやすいインフォグラフィクス（図2）とともに、主要ながん種を性別に提供しています。今後、さらに詳細のサバイバー生存率についても公開していきますので、ご意見をお聞かせいただければ幸いです。また、国立がん研究センターのがん情報サービスにおいてもグラフと表形式で公開されていますので、ご参照下さい。

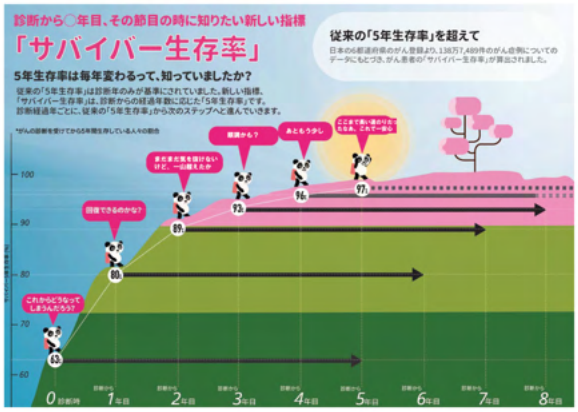


図2

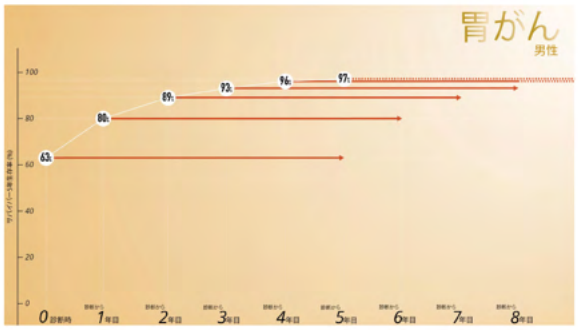


図3

サバイバー生存率（J-CIP Global）
http://jacr.info/j-cip/global/conditional.html

がん情報サービス（国立がん研究センター）
https://ganjoho.jp/reg_stat/statistics/dl/index.html#survival

登録室ご紹介

Miyazaki
宮崎県

宮崎県の概要

宮崎県は九州地方の東部に位置し、総面積7,735平方キロメートルのうち約75%が森林で占められています。

9市14町3村から構成され、平成30年10月1日現在の人口は約108万人で、平成9年から減少傾向となっています。高齢化率は31.7%で、全国より早く高齢化が進んでいます。

本県では、「第7次宮崎県医療計画」において、7つの2次医療圏を設定していますが、がん医療については、拠点病院等を中心に、地域の医療機関が連携して医療を提供している実情を踏まえ、県内を4つのブロックに分けたがん医療圏を設定しています。

県内には、国が指定する都道府県がん診療連携拠点病院1施設、地域がん診療連携拠点病院2施設が整備され、また県指定の宮崎県がん診療指定病院が2施設整備されています。

宮崎県のがん登録事業

昭和57年以降、がんは本県の死亡原因の1位となっており、年間約3,600人の方ががんで亡くなっております。

がんの実態に即したがん対策を推進するために、平成25年に宮崎県がん登録室を国立大学法人宮崎大学医学部附属病院に設置し、現在は、登録実務担当者2名でがん登録業務を行っています。

なお、当初から標準データベースシステムを導入しており、平成27年から遡り調査を実施しています。↗

↘現状と課題

本県における初めての罹患報告であった平成25年罹患分のDCNは26.0%、平成26年分は21.7%、平成27年分は19.5%と登録精度は年々向上していますが、更なる精度向上が課題と考えています。

このため全国がん登録の理解を深め、精度向上を図ることを目的に、県内全域の医療機関のがん登録実務担当者を対象とした研修会の開催に加え、地区別の研修会を開催しています。

最後に

本県のがん登録の歴史は浅く、経験の蓄積も十分でないため、各都道府県がん登録室の先進的な取組等を参考にさせていただきながら、がん登録事業を進めていきたいと考えておりますので、今後とも皆様の御指導・御鞭撻を賜りますよう、どうぞよろしくお願いします。

登録室リレー随筆

鳥取県健康対策協議会　尾崎 米厚

小さいことが強みの鳥取県の地域がん登録室

鳥取県地域がん登録の売りは、長い歴史と近年向上した精度である。さらに、鳥取県独特の組織の設置に端を発することと、がん登録室が大学医学部の教室内にあるのが特徴である。

鳥取県における地域がん登録は、1966年からの胃集団検診事業と1969-1970年の悪性新生物調査を基盤とし、1971年からは鳥取県医師会、鳥取県、鳥取大学医学部の三者で構成される「鳥取県健康対策協議会」発足と同時に、腫瘍登録と胃集検および胃集検フィルム読影の両事業を管掌し、対がん施策を推進する「がん対策専門委員会」(1984年よりがん登録対策専門委員会と改称)が「鳥取県腫瘍登録」として開始したのが発端である。1980年度がん征圧大会において、日本対がん協会賞を受賞した。本県の特徴は、鳥取県医師会が窓口になり県内医療機関からの届出を一手に引き受けていることと、鳥取大学医学部で実務と集計解析および報告書の作成等を行っている。県医師会の積極的な支援により医師会会員が無償で積極的に登録事業に関わっていただいていることは鳥取県の特徴であり、小さい県ならではの、密な協働体制が自慢である。現在、特任准教授1名(院内がん登録と兼務)、4人の非常勤職員で実務作業を日々行っている。

1965-1974年頃の登録作業は紙ベースで行っており、人の目で照合作業も行っていた。1975-1984年には電算機が導入され、カードパンチによる登録情報の入力、磁気テープによるデータ管理、集計解析が行われるようになった。1985年以降にはパソコン導入による、データの集約化、入力、照合、保存、集計解析の簡便化がすすみ、現状に近い形に進歩した。↗

↘発足当初(1971年)の届出件数は年間500~600件であったが、1985年には届出数が3,000件を超えた。1986年以降届出件数は減少し、2,000~2,500件で推移しDCNは30%以下であった。1997~2001年頃DCNが30%超となり、届出件数は2,000件程度で横ばいになり、精度の課題が大きくなった。2002年以降は、がん対策基本法の施行に伴い届出件数は年々増加しはじめ、2005年以後DCNは20%未満に改善した。2008年には大学病院のがん診療拠点病院の認定により届出件数急増し、2010年には届出件数6,000件を超えた(DCN10.5%)。この間、I/M比やHV/I(%)、検診発見がんからの未登録率の減少(50%前後→10%未満)も観察され、精度が向上した。その後も精度は向上し、2014年で届出件数6,825件、DCN6.0%となった。鳥取県の地域がん登録は、長い歴史の中で蓄積されたデータを大切にしつつ、近年精度が向上し、安定的な発展をしてきた。

近年鳥取県のがん対策において深刻な問題が発生している。75歳未満がん死亡率の高さ(直近で全国ワースト2位)や罹患率の高さ(全国ワースト7位)である。地域がん登録の最大の課題は、このような鳥取県のがんの課題に対して、データの利活用を通して事態の改善につながる知見が提供できていない点である。問題の原因や背景に迫る分析、問題が集積している介入すべき集団の特定、問題をわかりやすく県民に伝え関心を高める工夫等いずれも不足していると言える。今後は、地域がん登録により蓄積されたデータを県民の健康度改善に具体的に役立てることが期待される。

鳥取県がん登録室のメンバー

関連学会一覧

2019(令和元年)

日程	学会名	開催場所
9月19日(木) ～ 20日(金)	第45回日本診療情報管理学会学術大会 http://jhim45.umin.jp/	大阪府 グランフロント大阪
9月26日(木) ～ 28日(土)	第78回日本癌学会学術総会 http://www.c-linkage.co.jp/jca2019/index.html	京都府 国立京都国際会館
10月24日(木) ～ 26日(土)	第57回日本癌治療学会学術集会 http://congress.jsco.or.jp/jsco2019/	福岡県 福岡国際会議場 福岡サンパレス マリンメッセ福岡
10月23日(水) ～ 25日(金)	第78回日本公衆衛生学会総会 http://www.c-linkage.co.jp/jsph78/overview.html	高知県 高知市文化プラザかるぽーと ホテル日航高知旭ロイヤル 高知会館 高知新聞放送会館

私たちの活動にご協力ください

賛助会員(個人・団体)を随時募集しています

賛助会員

個　人… 年間 3,000円
団体1口… 年間 50,000円
(1口以上)

○寄付金も受け付けています
https://jacr.secure.force.com/

○入会のお申込みや寄付等のお問い合わせは
ウェブサイトの「お問合せ」よりお知らせください
http://www.jacr.info/

主な事業内容

がん登録に関する学術集会、セミナー等の開催
がん登録に関する様々な情報の提供
がん統計、がん登録に関する調査や研究の実施
国際がん登録協議会(IACR)への参加・協力
がん登録に携わる人材の育成やサポート
がん登録室の安全管理措置に関する活動
がん登録の広報媒体、冊子、教材、資料等の発行

認定特定非営利活動法人 日本がん登録協議会

JACR事務局だより

認定特定非営利活動法人　日本がん登録協議会事務局
濱松 若葉

事務局職員紹介

新年度を迎え、皆様いかがお過ごしでしょうか。
会員の皆様におかれましては、4月に会員情報の変更にご協力を頂きましてありがとうございました。令和の時代となり、事務局の体制も新たな体制になっております。
紙面をお借りして、事務局のスタッフをそれぞれ紹介させて頂きます。

No. 1

常勤職員　岡田 希栄

本年度より濱松から引き継いで常勤職員となりました、岡田希栄と申します。新年号の発表とともに本協議会の常勤職員として新しいスタートを迎えましたことを大変うれしく光栄に思っております。本協議会の活動を一層お支えできる事務局職員として、成長していく所存でございます。今後ともよろしくお願いいたします。

No. 2

非常勤職員　濱松 若葉

昨年度まで常勤職員として事務局に勤務をしておりましたが、この4月から非常勤職員としてJACRの活動に関わらせて頂くこととなりました。勤務形態が変わっても、JACRへの想いは変わらず、今後とも仕事に邁進する所存でおります。引き続き、縁の下の力持ちとして貢献していきたいと思います。

No. 3

非常勤職員　松崎 良美

非常勤職員として、今後ともささやかながらご尽力させていただく所存でございます。引き続き何卒よろしくお願い申し上げます。

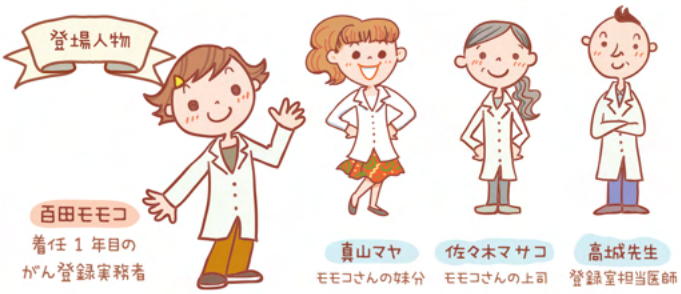
Renatech レナテック Recycling・Ecology for Nature Technology https://renatech.net

モモコさんと紫本

画：いのうえつぐみ

第 30 話 新元号編

第 29 話 何だこの感覚は編



編集後記

がん登録等の推進に関する法律に基づき集められた全国のがんの罹患の情報の利用がいよいよ始まります。本号では，かねてよりがん登録情報利用で待ち望まれているがん検診データとがん登録データの名寄せによるがん検診の精度管理に関するシンポジウムの記事等が掲載されております。安全管理の質を担保した上で、がん登録情報利用が今後様々なところから進むのではないでしょうか。
ご寄稿頂いた皆様ありがとうございました。(阪口昌彦　田渕健)

私たちは日本がん登録協議会を支援しています

がん登録の充実と発展を願い当協議会の活動に賛同、ご支援いただいている賛助会員（団体・個人）の皆様です。

社団法人 全日本コーヒー協会
日本医師会
NISSAY
東京海上日動あんしん生命
東京海上日動火災保険
FUJITSU
Aflac アフラック
MSD
日本歯科医師会
Yakult
おいしさ、そして、いのちへ。 Eat Well, Live Well. AJINOMOTO
Renatech レナテック
損保ジャパン日本興亜ひまわり生命
Hisamitsu
FUJIFILM Value from Innovation
MS&AD 三井住友海上あいおい生命
公益財団法人 日本対がん協会
AstraZeneca
富士レビオ株式会社
伏見製薬株式会社
大鵬薬品工業株式会社
中外製薬
第一三共株式会社
NOVARTIS
Synix サイニクス株式会社
Manulife マニュライフ生命
Cancer+scan パブリックヘルス推進のエンジン
Merck Serono
Pfizer

【団体】(一社)全日本コーヒー協会【5口】、(公社)日本医師会、日本生命保険相互会社、東京海上日動あんしん生命保険(株)、東京海上日動火災保険(株)、富士通（株)【4口】、アフラック生命保険(株)、MSD（株)【3口】、(公社)日本歯科医師会、(株)ヤクルト本社、味の素(株)、(株)レナテック、損保ジャパン日本興亜ひまわり生命保険(株)、久光製薬(株)、富士フイルムメディカル(株)、三井住友海上日動あいおい生命保険(株)【2口】、(公財)日本対がん協会、アストラゼネカ(株)、富士レビオ(株)、伏見製薬(株)、大鵬薬品工業(株)、中外製薬(株)、第一三共(株)、ノバルティスファーマ(株)、サイニクス(株)、マニュライフ生命保険(株)、(株)キャンサースキャン、メルクセローノ(株)、ファイザー(株)、武田薬品工業(株)【1口】

【個人賛助会員】田中英夫様、佐々木毅様、岡本直幸様、戸井田睦美様（他6名）（順不同）

発　行　JACR ニュースレター No.47　2019.7

認定特定非営利活動法人
日本がん登録協議会（旧称：地域がん登録全国協議会）
JACR Japanese Association of Cancer Registries

日本がん登録協議会事務局　理事長　猿木 信裕
〒104-0061　東京都中央区銀座8-19-18　第三東栄ビル503
TEL:03-3547-5992　FAX:03-3547-5993
E-mail:office@jacr.info　URL:http://www.jacr.info/